二〇一六年一二月九日　開催
《「留学生と語る」オープンディスカッション》

私の言葉の使いわけ

■話題提供者……Kassandra Louisse Lotivio、Manuel Marquez Lara、Laura Canca Portilla、Miriam Isabelle Nilsson、Shin Shin（甄　真）
■コーディネーター……サウクエン・ファン

社会のグローバル化が進み、人々の言語生活もますます複雑になってきている。特に最近は自分の母語や英語だけでなく、複数の言語や方言などの変種を日常的に使う人も少なくない。そこで今回のオープンディスカッションでは、身近な複数言語の使用者である本学の留学生五名を話題提供者として迎え、「私の言葉の使いわけ」というテーマで話してもらった。話題提供では、来日前と来日後の言語環境がどのように変化したか、どのように言語を学んでいるか、またどのように自分の持っている言語能力と価値観に基づいて言葉を使い分けて留学生活を送っているかなどについて取り上げられた。

サウクエン・ファン
（執筆＝ミラー成三）

その後いくつかのグループに分かれてディスカッションが行われた。なお、話題提供は主に英語が使用されたが、一部日本語に切り替えられることもあった。ディスカッションも英語と日本語の二言語が選択され、会場は複数の言語が使用される環境となっていた。

以下に五名の留学生による話題提供の内容を紹介する。（発表内容はすべて英語から日本語に翻訳したものをまとめている。）

Kassandra Louisse Lotivio さん（New Zealand）

私はニュージーランドからの留学生ですが、エスニック的にはフィリピン人にあたります。そのため、自己紹介はいつも悩みの種です。今日は、私が日常生活で日本語、英語、タガログ語をどのように使い分けているのかを紹介したいと思います。

まずはフィリピンについて紹介します。フィリピンには一七〇以上の言語や変種がありますが、そのうちメジャーなものは八つほどです。タガログ語は厳密には一つの方言ですが、(公用語である)フィリピノ語とほとんど同じです。家庭では大抵それぞれの方言を使用しています。英語を使用することもできますが、一般にフォーマルな言語だと考えられています。フィリピンでは通常子どもの時から英語の教育が始まります。私は幼稚園の頃から英語を勉強してきましたが、教師はタガログ語と英語を切り替えながら授業を行っていました。教育を受けた人は英語を使用することができますが、教育を受けてこなかった人もある程度は英語を理解することができると思います。

続いてニュージーランドです。ニュージーランドでは主に、英語とマオリ語の二つの言語があり、公共の看板、例えば学校の看板や道路標識などはこの二言語で書かれています。フィリピンの英語はアメリカ的なアクセントでしたが、ニュージーランド英語(Kiwi English)はそのアクセントとは異なる部分があり、初めは少し苦労しました。また、ニュージーランドに移ってからは家庭内でも英語とタガログ語を交ぜて会話していました。例えば「Alam mob a? Kamina sa work, may na-receive kaming maraming samples galing sa client na due in 3 days(あのね、先に職場で、取引先からサンプルをたくさんもらって結果の締め切りは三日後だ)」という感じです。このようなタガログ語と英語がミックスされた会話は珍しいものではなく、普段から行っているものです。しかし、家族以外の人と話す時は英語のみを使用していました。

日本では基本的に日本語です。お店に行った時も日本語で話しかけてきますし、アルバイトをしている時も日本語を使用します。ほかの留学生とも基本的には日本語で話しますが、時々英語を使うこともあります。このように、日本に来てからは言語使用が大きく変わりました。英語は限られた時にし

Kassandra Louisse Lotivio さん

か使いませんし、タガログ語は家族とオンラインで話す時にしか使用しません。そのような言語環境でも、今は、私の思考のプロセス、頭の中では三言語で考えています。しかし、その多くの部分を占めているのは英語だと思います。

Manuel Marquez Lara さん（Spain）

私は今まで多くの言葉を勉強してきました。英語を一〇年、フランス語を五年、日本語と中国語は三年、ドイツ語を半年間勉強しています。またラテン語と古代ギリシャ語も勉強していますが、この二つは書き言葉だけなので、日常で使用することはありません。私の母語でもあるスペイン語は世界で二番目に話されている言葉で、その多くはスペインと南アメリカで話されています。しかし、例えばタガログ語がスペイン語に影響されているように、スペインが世界中に植民地を持っていた時代の名残はそのほかの地域にも見ることができます。

スペインの外国語教育は英語が主で、その次にフランス語が盛んです。しかし、最近は経済的な理由から中国語の教育が増加してきています。外国語は早期から行われる場合が多く、特に英語教育は小学校から行われています。私も小学校から大学にかけてさまざまな言語を学んできましたが、特に大学から勉強を始めた日本語や中国語は非常に難しいと感じています。例えば中国語は細かな発音が多くて使い分けが難しかったり、字体が非常に似ている漢字を覚えなくてはいけなかったり、本当に大変です。また日本語と中国語は同じ漢字でも字体が全く異なる場合があり、それも大変な要因です。

これらを学ぶため、授業はもちろん効果的ですが、ほかにも方法はいろいろあります。例えば音楽を聴くこと、映画やドラマ、アニメを見ること、実際にインターアクションに参加してみることなどです。いろいろな方法を試してみると、授業では習わないような面白い訳や使い方に気づくことができます。また、ほかの外国語を参考にするという方法もあり

Manuel Marquez Lara さん

ます。例えば、私は中国語の漢字の読みを参考にして日本語の漢字の訓読みを勉強したり、スペイン語と同じ発音で意味が違うもの（例えばmono）などを見つけて覚えていくなどの方法を行っています。

私は今回の日本留学が初めての海外渡航でした。それまでに二年間日本語を勉強してきましたが、ガスの検針伝票や大学からの通知、町のポスターなど、本物の日本語に触れてまだまだ分からないことがたくさんあることに気づきました。外国語を本当に学ぶためには実際にその国に行って、その国のものを見て、その国の人々と話をすることが一番大事なのだと思います。

Laura Canca Portillaさん（Spain）

私の母語はスペイン語のみですが、これまで英語、フランス語、中国語、日本語を勉強してきました。また学んだことはありませんが、それ以外にもポルトガル語、イタリア語、ルーマニア語などのラテン語系の言語は共通点が多いので、理解することができます。また、スペイン内においてもスペイン語のほかにも（自治州ごとに）いくつか公用語があり、バスク語以外のヴァレンシア語、ガリシア語、カタルーニャ語、アラン語は理解することができます。

スペインでは英語教育が早期に始まります。私は七歳の時に学び始めましたが、幼稚園から始まる場合もあるようです。そのため英語を話せることが期待されますが、発音などがあまり上手でない場合も多く、話していることが理解されずに苦労することもあります。スペイン内ではエスパングリッシュ（Espanglish）と呼ばれる、英語とスペイン語が交ざった言語を話すこともあります。私たちも普段友人たちと話す時に、スペイン語を話しながら英語に切り替えることはありますが、ジブラルタルという場所は（地理的にはイベリア半島の南端ですが）現在はイギリス領となっており、特にこの場所ではエスパングリッシュが常に話されています。例えば

Laura Canca Portillaさん

「Hola, good morning. ¿Cómo estás? (Hi, good morning. How are you?)」のような表現が日常的に使われています。私自身、スペイン語で話している時も、「—do you know what I mean?」や「Anyway—」など英語が交ざってしまうこともあります。

スペインではあまり日本語を使用する機会はありませんが、クラスメイトや家族・友人に日本語を教える時などに使うことはあります。また、「いってきます」や「久しぶり」などスペイン語にない言葉は日本語で言うこともあります。逆に日本では、同じ大学からの留学生やメキシコからの留学生とはスペイン語を使用しますが、町や学校では、アジア系の顔をしていないためか英語で話しかけられることが多いので英語を使用しています。寮などで日本語を使用することもありますが、適当な言葉が思い出せない時などは英語を使用することが多いです。「うん、分かった、分かった。So can you come tomorrow ね?」のように交ぜて話しています。

Miriam Isabelle Nilsson せん (Sweden)

私はスウェーデンから来ました。日本で「スウェーデンから来ました」と言うと、「スウェーデンって何語? 英語?」と聞かれたりしますが、スウェーデン語が話されています。スウェーデン語はデンマーク語やノルウェー語と非常によく似ていて、方言くらいの違いしかありません。

私は幼い頃から英語に触れてきました。両親と一緒に英語の歌を聞いたり、映画を見たりしていました。スウェーデンでは子ども向けの映画以外は翻訳がなく、ほとんどは字幕がついているだけです。また、私はよくゲームをしていましたが、ゲームの場合、翻訳されていることはまずありません。言葉は分からないながらも実際にゲームをすることによって、いろいろな言葉や表現を覚えました。学校で英語の教育が始まったのは小学校三年生の時です。最初は英語の歌や簡単な会話から始めて、そこから徐々にテキストなどを使いながら、難しい会話をするようになっていきました。西洋の教育では、理解をするだけではなく、自分の意見や考えが表現できるようになったり、ディスカッションができるようになったりすることに主眼が置かれていると感じますが、これは非常に大事なことだと思います。

今私が日常生活で使用する言語は日本語と英語、そしてスウェーデン語です。先生や友達、家族と話す時に言語の切り替えが頻繁に起こるので、疲れることもあります。また、友達と英語で話したり、ルームメイトと日本語で話したりしている時に、突然ぱっとスウェーデン語が出たりして、驚かれることもあります。ただ、生活の中で言語に気を配りながら話をすることは上達するのに非常に大事なことだと思います。

スウェーデンでも、そこまで上達しなくてもよいと考える人はスウェーデン訛りの強い英語を話しています。また、インターネットが発達してからは、そこで学んだ表現や言葉を自分が話す時に使用したりもします。

最後に、外国語で話すことが恥ずかしいと思ってしまう人がたくさんいます。でも、私の日本語はまだまだです。毎日のように文法的な間違いをしますし、意味の違う言葉を使ってしまいます。だからと言って、それを聞いている友達は、私が話す日本語を完璧じゃないからやめた方がいいとは言いません。なぜなら、言いたいことはちゃんと通じているからです。きちんと頑張っていると相手も分かっています。それが言語の力であり、人とつながることです。だから恥ずかしいと思わずに、たくさん間違えて、お互い笑って、直した方がいいと思います。だから皆さんも是非、遠慮なく、どんどんいろんな人に声をかけて、広げていってください。

（※最後の段落部分は日本語で発表された。）

Miriam Isabelle Nilsson さん

Shin Shin（甄真）さん（China）

まずは、中国のことについて話をしたいと思います。私は内モンゴル出身で、今は北京で生活をしています。中国の言語というと中国語と思い浮かべる人が多いかもしれませんが、それは正確ではありません。中国には多くの言語と方言があります。内モンゴルでは内モンゴル方言が話されていますが、それはモンゴル国で話されている言語とは異なり、むしろマンダリンに近い言語です。ただ、内モンゴルにもモンゴル語を話す人は多いので、公的な紙面や広告にはモンゴル語と中国語が両方書かれていることが多いです。中国では、標準的な中国語（普通話）を話す中国人はごくわずかで、ほとんどの人は何かしらの方言を話しています。異なる方言を使用して話す時には、お互いの話を理解することが難しい場合もあり、そのような時は標準的な中国語に近づけて話をしています。

日本では、いろいろな場面に遭遇します。例えば床屋に行っ

た時は、髪型の説明は難しいので、写真だけ見せて自分が外国人であることを伝えるようにしています。一度、散髪の後に「顔をシェーブしますか」と聞かれたことがあります。日本の人は非常に思いやりがあって、相手が外国人だと分かると、理解しやすいようにさまざまな方法で伝えようとしてくれます。しかし、同時にすべての外国人が英語を話せると思っているのかもしれません。とてもありがたいのですが、私にとっては「シェーブ」という言葉よりも「剃る」という言葉の方が簡単です。

以前、英語の授業で知り合った人と仲良くなって、友達になったことがあります。面白いのは、自分も彼も日常会話レベルの日本語は話せるのに、今でも英語で話をしていることです。お互い英語の方が上手なわけでもないですし、反対にお互いの英語がおかしくて話している途中で笑いが起きたりすることもあります。つまり私がここで言いたいことは、私は言語の能力で話す言葉を決めているわけではないということです。言語はあくまでも情報を伝えるためのツールであって、自分が伝えたいことを伝えることができれば、文法に間違いがあっても問題はないと思います。今私は少なくとも中国語、英語、日本語を使用することができますが、そこからぴったりの言葉を選択して使用しています。かわいいものには日本語の「かわいい」を使用しますし、その時に英語や中国語を選択することはありません。言語を選択する理由は、言語の能力だけではないのです。

Shin Shin（甄真）さん

まとめ

以上のように、五名の話題提供者はいずれも幼い頃から自分の母語以外の言語に触れ、生活の中で複数の言語を使い分ける経験を重ねてきたことがわかった。彼らの話を聞いた参加学生は大変刺激を受けた様子で、留学生が日常的に二言語、三言語間で切り替えを行っており、それが言語能力とは異なる理由によるものであること、そしてそれが彼らにとっては

自然な言葉の使い方であることが印象的だったという感想が多く見られた。また、同じ外国語学習者として、留学生の言語習得の態度にも強い感銘を受けていたようである。たとえその言語の能力が高くなくても間違いを恐れずに積極的に話してみることが大切だという留学生の意見には多くの共感が寄せられていた。

今回のオープンディスカッションは、参加した学生にとって、話題提供で留学生の言語使用の実際を耳にし、ディスカッションを通して実際の言語使用を体験する非常によい機会になったようである。